

伊勢物語・東下り章段についての試論

大井田 晴彦

はじめに

都を離れた主人公が東国をさすらい、望郷の思いを胸に抱きながら、かの地の人々と交渉を重ねていく、いわゆる東下り章段は、『伊勢物語』において分量的にも大きな比重を占めている。のみならず、この作品の根幹にかかわる、最も本質的な物語群といえよう。やはり枢要な章段とされる、二条后や伊勢の齋宮との恋物語も、畢竟は東下り章段へと収斂していく。すなわち、第三―六段の二条后への恋の挫折が、七段以降の展開の契機となっておりとも読めるのである、貴種流離の話型から見れば、第六十九段の齋宮との関係で生じた罪を背負って主人公はさすらいことになる。これらの恋物語は、東下りへの序章とみなすこともできよう。本稿では、この東下り章段について、多角的に検討し、その主題性と、作品に占める重みをあらためて確認したいと思う。

伊勢物語・東下り章段についての試論(大井田)

一

『伊勢物語』の多くの章段がそうであるように^①、業平の東下りもまた、虚構である可能性が高い。東下りを否定する確実な資料があるわけではないものの、貴種流離譚の話型による物語化と考えるのが妥当であろう。業平は、故郷を放逐された王統のさすらい人たちの伝承に連なる人物とみられるのである。ここで注意されるのが、記紀の英雄ヤマトタケル(倭建命・日本武尊)である。ヤマトタケルの伝承をたどっていくと、『伊勢物語』の東下りとの多くの共通性が認められる。記紀の相違は少なくないが、『古事記』によれば、その粗暴さを父景行天皇から恐れ疎んじられたヤマトタケルは、朝廷に従わぬクマソタケルの征討を命ぜられる。クマソに続きイヅモタケルをも討伐したヤマトタケルに父は東国征伐を命ずる。

かれ、命を受けて罷り行しし時に、伊勢の大御神の宮に参入りて、神の朝廷を拝みて、すなはちその姨倭比売の命に白したまひしく、「天皇、すでにあを死ねと思はすゆゑにか、何とか

も西の方の悪しき人などを撃ちに遣はして、返り参上り来し間、いまだいくどもあらねば、軍衆を賜はずて、今さらに東の方十あまり二つの道の悪しき人などを平らげに遣はすらむ。これによりて思惟はば、なほ、あれすでに死ねと思ほしめすぞ」と、患へ泣きて罷ります時に、倭比売の命、草薙の剣を賜ひ、また御囊を賜ひて、「もし、にはかなる事あらば、この囊の口を解きたまへ」と詔らしき。

(景行記・新潮日本古典集成一六一～一六二頁)

死を覚悟するヤマトタケルは、齋宮である叔母のヤマトヒメの許に赴く。齋宮は、草薙の剣と火打ち石を入れた囊を与え、武運を祈る。その基底には、齋宮の巫女的な力、「妹の力」(柳田国男)を身に纏って、以後の危難を乗り越えようとする発想がある^③。ここで特に注意すべきは、東国に下るに際し、伊勢の土を踏み、そこで女性に会っている点である。伊勢という地は、端的に言えば、東国への窓口、玄関のようなものと認識されていたのではないか。ここで、在原業平とおぼしい男を主人公とする物語が『伊勢物語』と呼ばれるゆえんが理解されると思う。この題号について、古くからさまざまな説がある^④。六十九段の齋宮との禁忌の恋が作品の中核をなすからだという説が最も有力である。しかしながら、六十九段の話題は、確かに重々しいけれども、一連の齋宮章段(第七十～七十二、七十五段など)が物語全体の主題性を担っているのか、果たして疑問である。しばしば指摘されるように、齋宮との関係で生じた罪が、深

層において流離の契機となっているわけで、この段は東下りの発端として考えるべきなのである(もちろん、章段の配列は問題でない)。六十九段は伊勢を舞台としているが、物語の眼差しは、ここにとどまらず、遠く東国へと延びている、ということである。すなわち、『伊勢物語』という書名には、(伊勢を起点として広く)東国物語、という含意があるのではあるまいか。

物語の東国への眼差しは、初段において既に認められるところであった。

昔、男、初冠して、平城の京、春日の里にしろよしして、狩りにいにけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。この男、垣間見てけり。思ほえず、ふるさとにいとほしたなくてありければ、心地惑ひにけり。男の着たりける狩衣の裾を切りて、歌を書きてやる。その男、しのぶずりの狩衣をなむ着たりける。

春日野の若紫のすり衣しのぶの乱れ限り知られず

となむ、おひつきて言ひやりける。ついでおもしろきことともや思ひけむ、

陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめにし我ならなくに
といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。(小学館新編日本古典文学全集・一一三～一一四頁)

主人公は、元服し、官人としての新たな人生を踏み出した。しかし、新たな生活になじめないものを感じる彼は、平城京、すなわち先祖

ゆかりの「ふるさと」へと赴く。そこで出逢った姉妹に男は歌を贈った。この「春日野の……」の歌が、重要である。「春日野」は「若草」「若菜」などを想起させる地名であり、元服したばかりの男や「なまめいたる女はらから」のイメージとも響き合う。しかし、「若紫」という続き具合はいささか不自然である。というのも、「紫」は「武蔵野」との関連で詠まれる語だからである。そして、「しのぶ」は次の源融の歌に示されるように「陸奥」にちなむ語である。すなわち、一首のうちに、春日野↓武蔵野↓陸奥、という地名が織り込まれていることになる⁴⁾。これは、平安京にあって遠く東国を憧れる男の心情の表象であり、また、以後の物語の展開を予告するものとも考えられる。このように、東国への並々ならぬ意識が『伊勢物語』の始発から認められるのである。

二

『景行記』の記述を読み進めよう。ヤマトタケルは尾張・相模を服従させるが、西国征討よりもいっそうの困難を伴った。相模の国造は、ヤマトタケルを欺き、野に火を放ったが、叔母から賜った草薙の剣と火打ち石によって、難を逃れた。走水では、海神の妨害にあうが、オトタチバナヒメが入水することで、海は凪いだ。いわば「妹の力」に支えられ、守られることで、かろうじて戦に勝利したのだった。さらに伊吹山の神の征討に向かうが、草薙の剣を携えな

伊勢物語・東下り章段についての試論(大井田)

かったことが身の破滅を招く。罹病したヤマトタケルは「嬢子の床のべに わが置きし 剣の太刀 その太刀はや」と歌い、世を去った。

前半部と後半部の、物語の色調の変化を指摘することはたやすい。クマソやイヅモの征討に見られた、輝かしさや逞しさが後退し、東征においては滅びが予感され、悲劇的な色彩が濃厚になっていく。これは何を意味するのだろうか。

言うまでもなく、ヤマトタケルという英雄は実在の個人ではない。古代大和朝廷の勢力拡充の軌跡を、一人の英雄に投影したものに他ならない。西を制圧した彼が東征においていたく傷つき、病没したという伝承は、大和の人々にとって、早く勢力圏に組み込まれた西国に比べ、東国への進出がいかに困難であったか、そして東国がいかに畏怖すべき対象であったかを示しているのである。

東と西に対する、かかる意識は、『伊勢物語』にも受け継がれている。六十―六十二段は、西国を舞台とする物語群である。六十段は宇佐、六十一段は染川での出来事で、六十二段は地名の明示がないが、六十段とよく似た話であり、やはり九州を舞台としていると見てよいだろう。六十段の話は、こうである。宮仕えの忙しさに紛れて、あまり顧みることのできなかった女が、他の男性につき従って地方へ下った。やがて勅使として宇佐に下った主人公は、かつての妻が「祇承の官人の妻」になっていることを知り、接待を強要する。男は、「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」と

詠んだ。女は昔を思い出し、恥ずかしさのあまり、尼となって山に隠れてしまった。六十二段もまったく同様の話で、再会したものと夫から「いにしへの匂ひはいづら桜花こけるからともなりにけるかな」「これやこの我にあふみをのがれつつ年月ふれどもまさり顔なき」と執拗に歌を浴びせられた女は、消息を絶ってしまった。この二つの段は、物語中でも、とりわけ後味の悪い章段といえよう。いったい、『伊勢』という作品は、男の身勝手さに寛容で、女に手厳しい傾向があるのだが、これらはその典型例である⁽⁵⁾。もとより「宮仕へいそがしく、心もまめならざりけるほどの家刀自」(六十段)、「年ごろおとづれざりける女」(六十二段)とあるように、男が充分な愛情を注がなかったことに悲劇の発端があったのである。しかし、それも「心かしこくやあらざりけむ、はかなき人のことにつきて」(六十二段)と、女の愚かさに帰せられてしまう。一方、勅使として朝廷の權威を笠に着て、思うがままに振る舞うところに男の醜さは極まっている、といえよう。男が勅使に設定されている点が、何よりも重要なのである。「京にありわびて東に行きけるに」(七段)、「京や住み憂かりけむ、東のかたに行きて住み処求めむとて」(八段)、「身を要なきものに思ひなして、京にはあらじ、東のかたに住むべき国求めに」(九段)などのような、無用者として東に下るのは、まったく対蹠的である。『伊勢』において、主人公の統一的な人物像を云々することじたい無理だけれども、それにしても懸隔はなはだしい。主人公の性格の違いは人々の、古くからの東西に対する

認識の差を反映しているはずである。早くから朝廷の支配下にあった西国にあっては、男は勅使として我がままの限りを尽くし、依然として恐れと憧れの対象であった東国では、さすらいを続ける悲劇の貴種として語られるのである。

三

ヤマトタケルの物語の叙情性は、特に『古事記』においては、多くの歌謡に支えられている面が大きい⁽⁶⁾。

「さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて 問ひし君はも」とは、オトタテバナヒメが走水の海に入水した時の絶唱である。直前の、焼津での野火の苦難を振り返ってのものである。燃えさかる炎のイメージは、この後の激しい情熱とも重なり合う。元来、この歌は、早春の野焼きの場で歌われたものと想像される。この時に、男女の歌の掛け合いが行われたのだろう。これが『古事記』の文脈に組み込まれることで、愛する夫への哀切な呼びかけとなっているのである。なまじの新作よりも、共同性の濃厚な民謡のほうが、叙情性を強く発揮することがあるという好例である。ここで想起されるのが『伊勢』十二段である。

昔、男ありけり。人の娘を盗みて、武蔵野へ率てゆくほどに、盗人なりければ、国の守にからめられにけり。女をば草むらの中に置きて逃げにけり。道来る人、「この野は盗人あなり」と

て火つけむとす。女わびて、

武蔵野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり

と詠みけるを聞きて、女をばとりて、ともに率ていにけり。

(一二四～一二五頁)

せっかく盗み出した高子が、芥川のあたりで鬼に食われてしまった、という六段の変奏ともいべき段である。それはそれとして、女の歌が初句を「春日野は」とする古今集歌(春上・一七・詠み人しらず)の改作であることが注目される。原作の古今集歌は、おそらく野焼きの民謡だったとおぼしい。「春日野の飛ぶ火の野守出でて見よ今いく日ありて若菜摘みてむ」(古今・春上・一八・詠み人しらず)も同様である。かかる野遊びの、男女の求愛の歌の転用は、前掲のオトタチバナヒメの場合によく似ている。ところで「春日野」といえば、直ちに連想されるのが初段である。しかも「若紫」「若草」という共通する語が、どちらも若々しい恋人の比喻となっている。春日野↓武蔵野(↓陸奥)という初段に示されたベクトルは、やはり重要であろう。

さて、白い鹿に化した足柄山の神を制圧したヤマトタケルは、坂に登って「あづまはや」と叫んだ。足柄山より東をアヅマと称するゆえんを語る地名起源譚ともなっている。オトタチバナヒメの「さねさし……」の歌に呼応する趣であり、空間と時間を隔て、幽冥境を異にする二人が、歌の力によって強靱に繋ぎ止められているので

伊勢物語・東下り章段についての試論(大井田)

ある。

アヅマの語源はともかく、この言葉が、「吾妻」への恋情を喚起させるのは、語の響きからごく当然といえよう。

・庭に立つ麻手刈り干し布さらす東女を忘れたまふな(万葉集・巻四・五二一・常陸娘子)

・息の緒に我が思ふ君は鶏が鳴く東の坂を今日か越ゆらむ(同・巻十二・三一九四・作者未詳)

・鶏が鳴く東男の妻別れ悲しくありけむ年の緒長み(同・巻二十・四三三三・大伴家持)

右に掲げた、わずかな例を見てもアヅマが恋人へのいとおしさと結びついていることが理解できよう。「鶏が鳴く」はアヅマの枕詞。その掛かり方は諸説あるが^①、日の昇る東と、鶏鳴のイメージは容易につながる。そして、朝を告げる鶏の声に促されて、男がしぶしぶ女のもとを立ち去る情景を彷彿させる力を、この語は秘めている。実は「鶏が鳴く東」のイメージを、一つの物語へとふくらませているのが、『伊勢』十四段に他なるまい。

昔、男、陸奥の国にすずろに行きいたりにけり。そこなる女、京の人はめづらかにやおぼえけむ、切に思へる心なむありける。さてかの女、

なかなか恋に死なずは桑子にぞなるべかりける玉の緒ばかり

歌さへぞひなびたりける。さすがにあはれと思ひけむ、行き

て寝にけり。夜深く出でにければ、女、

夜も明けばきつにはめなでくたかけのまだきに鳴きてせな
をやりつる

と言へるに、男、「京へなむまかる」とて、

栗原の姉齒の松の人ならば都のつとにいざと言はましを
と言へりければ、喜ばひて、「思ひけらし」とぞ言ひをりける。

(一二六—一二七頁)

自分に心を寄せる女が不憫になった男は、女のもとを訪れるが、まだ夜深いうちに出てしまった。女は鶏が夜明けを告げたせいだと早合点して、鶏を罵る。「なかなか」の歌は万葉歌(巻十二・三〇八六・作者未詳)の異伝であり、「夜も明けば」の歌では「きつ」「くたかけ」などの方言が用いられることで、田舎じみた女のさまが印象づけられる。東下り章段にあっては軽妙な段だが、やや後味が悪いのは、都人の価値観と論理によって鄙の女を裁断し、嘲弄しているからである。相容れないものを容赦なく切り捨ててしまう「みやび」の厳しさと言えそれまでであるけれども、男の真意を理解できぬ純真な女の姿は哀れである。京に帰るに際して、男は「栗原の……」の歌を女に贈った。類歌に「住江の岸の姫松人ならばいく世か経しと言はましものを」(古今集・雑上・九〇六・詠み人しらず)「小黒崎みつの小島の人ならば都のつとにいざと言はましを」(同・東歌・一〇九〇)などがあるが、尾津岬でヤマトタケルが詠んだ「尾張に ただに向かへる 尾津の崎なる 一つ松 あ

せを 一つ松 人にありせば 太刀はけましを 衣着せましを 一つ松 あせを」との類似が目される^⑧。やがて訪れる死を覚悟すること、再び戻ってきたこの土地と松への愛着がいっそう鮮明となる。そして「松」は「待つ」との掛詞的連想によって、ヤマトタケルの帰還を待ちわびているミヤズヒメの喩になっているのである。むろん、「栗原の……」の歌には、人生への諦念や妻への愛情など片鱗もうかがえない。きわめて卑俗な次元に引き下ろされてしまっている。しかし、その表現と発想の類型においてヤマトタケルの歌を受け継いでいることは確実である。あらためて東下り章段を見直してみると、随所に妻恋しさが歌われている。九段の「唐衣きつなれにしましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ」はその典型であるし、前掲の十二段にも「若草のつま」とあった。異国にあって都に残してきた妻を恋するのは当然だけれども、やはりアヅマの語が喚起するところが大きいのであるまいか。

都に安住の地を見出し得ない主人公は、新天地へのいささかの憧れと、鄙への少なからぬ恐れを抱いて東国に下る。十四段に顕著なように、もとより鄙の地の人々と、交流が成り立つはずもない。次の十五段のような例は、極めて稀である。

昔、みちの国にて、なでふ事なき人の妻に通ひけるに、あや
しう、さやうにてあるべき女ともあらず見えければ、

しのぶ山しのびて通ふ道もがな人の心の奥も見るべく
女、限りなくめでたしと思へど、さるさがなきえびす心を見て

は、いかがはせむは。

(一二七頁)

解釈の分かれる段だが、この人妻は、もとは都人であって、何らかの理由で零落し、この陸奥で土地の男と一緒にになったのではないか。十段は、武蔵国で逢った娘の母が、二人の仲を懸命に取り持とうとする話だが、「父はなほ人にて、母なむ藤原なりける。さてなむあてなる人と思ひける」とある。同様の事情が想像されるのである。女に陸奥には不似合いな、都の空気を看取した男は、歌を読みかけずにはいられない。しのぶ山のように奥深いあなたの心に分け入ってみたい、心を通わせたいとする男の歌は、しかしながら、女にとってはあまりに残酷である。女は男に深く心を動かされつつも、返歌しない。女にとって、歌を詠むことはさほど困難ではないはずだが、鄙の雰囲気染まった我が身を恥じる気持ちが躊躇させるのである(十三段では、逆に男が鄙の人となった自分を恥じていた)。そのような女に「人の心の奥も見るべく」とは、男に何ら悪意はないけれども、追い打ちをかけるようなものであろう。女は、ここで歌を詠まず、男との関係を遮断することで、かえって心の交流を保とうとする。逆説的な「みやび」のありかたが示されているのである(90)。

四

『伊勢物語』の多くの段がそうであるように、一連の東下り章段

伊勢物語・東下り章段についての試論(大井田)

も虚構である可能性が高い。ヤマトタケルに代表されるような、貴種流離の話型に沿って、男は東国をさすらうのである。そして、かかる話型に嵌め込まれることで、業平は、古代の英雄の系譜に連なる、物語の主人公として大きな変貌を遂げるのである。あるいはまた、兄行平の須磨蟄居の史実(古今集・雑下・九六二)との対で構想されたのかも知れない。しかし、これだけでは充分な説明とは言えない。古くから都人は、東国に対して憧れと恐れを抱いていた。都人の東への意識を、もう少し掘り下げる必要がある。それは『伊勢』の成立を解く鍵にもなるはずである。

平安時代初頭の二大事業として軍事と造作、すなわち東国経営と新京造営が推し進められた。その結果、朝廷の支配域は、遠く陸奥にまで及ぶこととなった。かかる動向は、文芸にも影響を与えた。陸奥に対する興味と関心が高まり、新たな素材として好まれるようになったのである。『古今集』巻二十の東歌は陸奥国七首、以下、相模国一首、常陸国二首、甲斐国二首、伊勢国一首の順で配列されており、『万葉集』と比べても、陸奥国の占める割合が極端に高い。『古今集』に先立つ、いわゆる国風暗黒期の漢詩では、東国は、中国北部の辺境のごとく描写されていた。例えば「王事は古来鹽きこと靡しと称ふ 長途の馬上歳云に闌なり 黄昏の極嶂に哀猿叫ぶ 明発の渡頭に孤月団かなり」(凌雲集・遠使辺城・小野岑守)などである。一種のエキゾチズムが認められよう。『伊勢物語』の東下りは、かかる時代の文化の所産なのであった。

既に述べてきたように、東国への眼差しは、既に初段に認められる。男の「春日野の……」の歌の補足説明のようなかたちで「陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめにし我ならなくに」(古今集・恋四・七二四・源融、第四句「乱れむと思ふ」)の歌が記されている。「心余りて言葉足ら」ざる主人公の歌を補うつもりなのかも知れないが、なくてもさほど解釈に支障をきたすとも思われない。やはり作者が河原左大臣源融であること、そして「陸奥」を詠んでいることが何よりも重要なのではないか。唯一、融が登場する八十一段は、さまざまな示唆を与えてくれる段である。

昔、左のおほいまうちぎみいまそかりけり。賀茂川のほとりに、六条わたりに、家をいとおもしろく造りて住みたまひけり。神無月のつごもりがた、菊の花うつろひ盛りなるに、紅葉の千種に見ゆる折、親王たちおはしませて、夜ひと夜、酒飲みし遊びて、夜明けもて行くほどに、この殿のおもしろきをほむる歌詠む。そこにありけるかたみ翁、板敷の下にはひ歩きて、人にみな詠ませ果てて詠める。

塩釜にいつか来にけむ朝風に釣りする舟はここによらなむとなむ詠みけるは、みちの国に行きたりけるに、あやくおもしろき所々おほかりけり。我がみかど六十余国の中に、塩釜といふ所に似たる所なかりけり。さればなむ、かの翁、さらにここをめでて、「塩釜にいつか来にけむ」と詠めりける。

(一八二―一八三頁)

陸奥の塩釜の景を模した河原院は、風流の場として有名であった¹⁰⁾。右の他にも「陸奥ノ国ノ塩釜ノ形ヲ造テ、湖ノ水ヲ汲入テ、池ニ湛ヘタリケリ」(今昔物語集・巻二十七・二)「池ニ毎月ニ塩三十斛ヲ入テ海底ノ魚虫ヲ令住之由」(顕昭古今集註)などと、その贅を尽くした風流のさまが伝えられている。融がかかる風流三昧の生活を樂しむのは、生来の気質もあるうが、やはり政治面での挫折感によるところが大きい。左大臣とはいえ藤原氏の専横によって実権はない。陽成退位の際には「近き皇胤をたづねば、融らもはべるは」と帝位への期待を示すも、基経に一蹴されてしまう(大鏡、古事談など)。嵯峨の皇子という高貴な血筋への自負と、政界での不如意とが、融を脱俗的な生活に向かわせるのである。その境遇は、春宮になれなかった惟喬親王にも通ずる。この後、八十二、八十三、八十五段に惟喬親王関係の物語が続くのは、意識的な配列であろう。この河原院に、翁、すなわち主人公が現れて寿ぎの歌を献ずる。実際に、業平と融の間に交流があったのか。それを裏付ける資料はないが、次の例は参考になる。

家に、行平朝臣まうで来たりけるに、月のおもしろかりけるに、酒らなどたうべて、まかりたたむとしけるほどに

河原左大臣

照る月をまさ木の綱に撚りかけて飽かず別る人をつながむ

返し 行平朝臣

限りなき思ひの綱のなくはこそまさ木のかづら撚りも悩まめ

(後撰集・雑一・一〇八一―一〇八二)

邸を退出しようとする行平と、それを引き留めようとする融のやりとりである。やはり惟喬親王と業平の交流に似たものが感じられる。兄行平と連れだって、業平が融のサロンに出入りしていても不思議はない。八十一段が伝えるように、業平こそが河原院のサロンの花形だったのであるまいか。さらに想像を逞しくしよう。河原院が陸奥の塩釜の浦の景を模しているということ、ここに都人の東国への憧れがはつきりと見て取れる。「我がみかど六十余国の中に」「似たる所な」い名勝を移した河原院を舞台とし、陸奥に下ったさすらい人の立場になって、その感慨を詠んだのが、いわゆる東下り章段ではなかったか。演劇の類が行われていた可能性も否定できない。「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答えよ」(古今集・雑下・九六二)と詠んだ行平は、塩釜の景に、流謫の日々を思い出し、涙したかも知れない。初段と八十一段は、『伊勢物語』の生成の場合、河原院のサロンであることを証し立てているのであるまいか^①。王族の血統への誇り、超俗的な風流志向、政治的敗者への共感など、この物語の基調は、河原院とそこに集う人々の共有するものであった。

むすび

『伊勢物語』は、しばしば「みやび」の文学と評される。これは、

伊勢物語・東下り章段についての試論(大井田)

この物語が都市平安京を舞台とすることを、必ずしも意味しない。この物語にあっては、むしろ平安京は人間疎外の場としてある。都会にあって断絶した人と人の絆を回復しようとする営みが「みやび」であり、和歌こそが、そのかけがえのない仲立ちなのである。主人公の男は、しばしば都の重臣から逃れ、自身を解放しようとする。奈良(初段)、長岡(五十八、八十四段)、摂津(三十三、六十六、八十七段)などに赴くのは、在原氏ゆかりの地だからであり、都では崩壊してしまった氏族共同体が、かろうじて残されているからである。

都に安住の地を見出せない男は、新たな生活を求めて東国へと出発する。しかしながら、鄙にあって、他者との心の交流など、なおさら望めるはずもない。男は、あらためて自身が都人であることを痛感し、あれほど厭っていた都への望郷の念を強くする。

昔、男、すずろにみちの国までまどひいにけり。京に思ふ人に言ひやる。

波間より見ゆる小島の浜びさし久しくなりぬ君に逢ひ見で
「何ごともみなよくなりにけり」となむ言ひやりける。

(二二頁)

配列上、東下りの最後に位置する百十六段である。上の句は「久し」を導く序詞にとどまらない。遙かな都への男の眼差しが彷彿されるものとなっている。「何ごともみなよくなりにけり」については、諸注釈が字面通りに理解しているが、いかがなものか。男が、陸奥

で新たな女性と結婚して、財を成したことを意味しているのだろうか。私にはむしろ、名づけようのない寂しさと諦念が漂っているように感じられる。この段に即して考える限り、男は陸奥で朽ち果て、二度と都の土を踏むことはないであろう。ヤマトタケルの絶唱「倭は 国のまほろば たたなづく 青垣 山隠れる 倭しうるはし」にも通ずる、清澄で哀切な響きがここにはある。

【注】

- (1) 目崎徳衛『平安文化史論』(昭和四十三年、桜楓社) II 「在原業平の官歴について」「在原業平の歌人的形成」
- (2) 坂本和子「古代物語と伊勢齋宮」(『国学院雑誌』昭和四十五年一月) は、豊富な事例を挙げて次のように指摘している。「齋宮とは若い皇子の人格の完成のために必要な宗教的力を付与せしめ得る聖なる女性であった。倭建命は倭姫命(もしくは五百野姫かもしれない)によって夷狄を征する力を与えられ、大津皇子も大来皇女に会った後に持統天皇に反旗を翻したものと考えられた。同様に、幼い冷泉院を助け育てるものとして源氏と藤壺は齋宮女御を入内させた。」
- (3) 福井貞助『伊勢物語生成論』(昭和四十年、有精堂) 第一章に諸説が検討されている。そもそも正統な文芸ならざる物語の題号を云々することの意味があるのか、という疑問もある。詩歌集と異なり、作者や編者の意図とは無関係に命名され、それが流布することも多かったと想像される。別に『在五が物語』という書名があることも、裏付けとなる。
- (4) 鈴木日出男『古代和歌史論』(平成二年、東京大学出版会) 第五篇第二章『伊勢物語』の和歌
- (5) 野口元大『古代物語の構造』(昭和四十四年、有精堂) 第一章二「みやびと愛」

- (6) 以下、歌謡の理解には鈴木日出男『王の歌』(平成十一年、筑摩書房) 第一章「倭建の流離物語」によるところが大きい。
- (7) 例えば「鶏は夜のあか時になく故に、明といひかけたるなり」(冠辞考)、「鶏が鳴くぞ、やよ起きよ吾夫といふ心にて続くなるべし」(万葉枕詞解) など。また、西郷信綱『古代の声』(昭和六十年、朝日新聞社) 「アヅマとは何か」も示唆に富む。
- (8) ちなみに七十二段も、この場面に通ずるものがある。「昔、男、伊勢の国なりける女、またえあはで、隣の国へ行くとして、いみじう恨みければ、女、大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる浪かな。六十九段の後日談であり、男は再び伊勢を訪れた。「松」は男を「待つ」女の比喩である。
- (9) 拙稿「みやび」に生きる人々『伊勢物語』『源氏物語』の女たち」(『国語と国文学』平成十四年五月)
- (10) 河原院については、高橋和夫『源氏物語の主題と構想』(昭和四十一年、桜楓社) III 五「源氏物語の〈六条院〉の源泉について」、増田繁夫『源氏物語と貴族社会』(平成十四年、吉川弘文館) 第三章一「河原院哀史」が詳しい。
- (11) 渡辺実「源融と伊勢物語」(『国語と国文学』昭和四十七年十一月)、『新潮日本古典集成 伊勢物語』(昭和五十一年) 附説。もちろん『伊勢』が一回的に成立したとは考えにくく、氏は、在・紀・源の三氏の系統で、多元出発多元成長したとみる。従うべきであろう。

Abstract

On Tales of Ise and east going down

OIDA, Haruhiko

Chapters of going down to the eastern provinces are important in Tales of Ise (*Ise-Monogatari*). Roam of a chief character (we identify him with Ariwara-no-Narihira) resembles it of Yamato-Takeru (a hero of *Koziki*) very much. Before going down to the west, he went to Ise and met his aunt. He should be protected by a shrine maiden's power. It is Chapter 69 that is equivalent to this scene. It was thought that the title of Tales of Ise came from this famous chapter. However, in this story, the place name such as Ise means an entrance to an eastern country. Title of *Ise-Monogatari* means tales which happened in an east country. Yamato-Takeru who brought west countries under control went to an eastern country, and died of an illness there. Consciousness for the east and the west of the ancients reflects the story. Similarly it has also influenced the person image of the hero of *Ise-Monogatari*. In Tales of Ise, there are fear and yearning for the east everywhere. The existence of Minamoto-no-Touru appears in chapter 1 and 81 attracts attention. Perhaps it is thought that Tales of Ise was created in his salon that many poets like Narihira gathered.